

日本歴史に見る 求められた女性の生き方について

小 出 卓 二

1. はじめに

「女性の性（さが）に光沢を」、女性のみのもつ特性を引き出して、磨きをかける。そして「配慮ある愛の実践」を建学の心とされた創始者（現名誉学長・学園長）小林倭文先生の長野女子短期大学は本年創立三十周年を迎える。私がお世話になって以来十年にもなる。今年は大変意義ある年を迎えることとなったのである。

十年にわたって女性文化史など講義して、女性の生き方について研究してきた中で、日本歴史に見る女性の生き方を貫く根底に小林倭文先生の哲理があるように思えてならない。先生は歴史をとおして女性のあり方を見てこられ、そして未来永劫にわたって変わらぬ理想像を強調されているのである。

意義ある年に当たって、自分の専門分野で、女性が自ら求め、また求められてきた生き方について、自分が歴史学徒として学んできたことを、この機会に是非まとめてみたい、そんな気持ちから概観的にまとめあげたものが、この研究報告なのである。

2. 神話時代

女性の特性 『記紀』によると、

(1)「ウケイ」でアマテラス大神に勝利を収めたスサノオノミコトが悪行を繰り返したために、怒ったアマテラス大神は、天の岩屋に隠れられてしまわれた。世界は真っ暗になり、

悪がはびこり、神神はすっかり弱り果ててしまわれた。ここに女神アメノウズメノミコトの出番がある。

(2)ニギノミコトの天孫降臨に際し、長身で、長い鼻、真っ赤なホウズキのようでしかも、嫌らしい眼光のサルタヒコが道を立ちふさいでいる。男神が赴いて交渉するが埒があかない。こまられたアマテラス大神は、「か弱い女ではあるが一人で行って訳を正しなさい」との特命を受けたアメノウズメノミコトの出番となるのである。

二回のアメノウズメの出番是最悪の状態で、困り果てていた八百万の神達の窮状の打開、男神ではどうにもならないことを、か弱い女神が、女神でなければできないことで（神がかり、いずれもムナチ、ホトをあらわにして）、八百万の神の「大笑い」を誘って、アマテラス大神を岩屋から誘導することに成功し、同時に汚れや罪惡の一切を笑いとばしてしまったのであり、またはサルタヒコの邪眼に打ち勝ち、ニギノミコトの道案内の協力者とさせることに成功できたという大きな役割を成しとげられたのである。

ムナチやホトは確かに男にはない、女のみの特性ではあるが、いつもそれをあらわにしなければいけないということではない。男にはできない例えば、女の「性（サガ）—特性」により、世の中や人間を復活、再生することにより、不安と混乱を取り除き、明るく、活

気を生み出すことが、女性の大事な役割であり、女性の生き方として、そうした役割を果たすことが重要であることを神話が教えてくれているのである。

『古事記』、『日本書紀』は日本人として、人間としての意識を示した最初である。また女性としての生き方を示す始めてでもあったのである。全くの始めとは、本能的なものの現れのような面を持っているとは言えないだろうか。そして、それがずっと後世まで受け継がれる性格があるのではないだろうか。

神話の女神を女性と同一視したのは、日本では神々と人間がつながっている。アマテラス大神の子孫が天皇であるというようなことからである。

2. 万葉の時代

女性の和歌 「神の前の平等」「法の下での平等」と言われるように、日本では万葉集から「歌の前の平等」が言われている。この時代には歌の前の平等と言う言葉は残念ながら文献（史料）には見られないが、歌に対する日本人の感情がそうであったのではないかとされている。

万葉の女性は、歌に生き甲斐を託したともいわれ、私どもは万葉の恋歌からそれを伺い知ることができる。また、歌は神々のことばを写す鏡といわれ、何よりもそれが言霊であることが言われている。衣通姫の如く言霊の歌を詠んで和歌3神の1人として、後世まで信仰をあつめ、女性の代表にもなっているのである。女性は以前から男以上に神との結び付きが強かったから、言霊を喚起することができ、それにふさわしい歌を作り得たように

思われる。従って、歌の世界からみても、女性は男性に決して劣ることがなかったのみならず、衣通姫のように女の思いやり、やさしさが言霊として天皇に通じたのであろう。

額田王も、この時代の代表的な女流歌人であった。このことが天智天皇、大海人皇子の大化改新の二人の実力者に愛されることにもなったといえるのかもしれない。

男以上に言霊を喚起させえる優れた歌を詠むことのできるそんな女性こそ、時代が求めた女性像ではなかっただろうか。歌の前の平等と言うことのできる意味もその意味で大変重要であるとも考えるのである。

3. 女房文学の時代

心の安らぎ カナ文字が女性の文字となつて、微妙な心の動きの細部までしっかり文章化できるようになったことが文学の黄金時代をつくりだし得た原因の一つでもあるが、藤原氏が自分たちの娘を天皇の後宮に入れようとして、教養ある優れた侍女を必要とした。中下流貴族の女性たちの、憧れの最も魅力的な職業と考えられたようである。そのため学問や教養を積む必要があった。世界に誇る『源氏物語』の作者紫式部はその代表者で、しかも道長の娘彰子の侍女であったということで、第一人者であったと言える。その紫式部は『源氏物語』のなかで、理想の男即ち紳士である光源氏をして、上流貴族の女性葵ノ上、六条御息所などは地位、身分や学問、教養が邪魔をして面白くない。それより、中流貴族の女性「夕顔」「花散里」「紫ノ上」などは、鼻にかけるところは全くなく、気配りにより心の安らぎを与えてくれる。そのため足

がつい向いてしまうことを書いている。

理想の男光源氏に作者の紫式部が求めた女性、身分や学問、教養より以上に心やすまる女性、心の安らぎを与えてくれる女性であった。やさしい、あたたかさ、思いやり、気配りのできる女性を大事にしているということは、学問教養ある作者自身の女性としての反省であったのかもしれない。

また女房の役割は、主人を如何にして引き立て目立つようにするか、如何に素晴らしい主人であるかを天皇に認めてもらうかであった。『源氏物語』などが、そうしたことから生まれたものであるとすれば、この時代の求められた女性像が明確に把握できるように思われる。

『源氏物語』よりおくれて書かれた『とりかえばや』では、男性が女装し、女性が男装して、東宮や朝廷に仕える、ユングのいうアニマ（男の心の中の女性像）、アニムス（女の心の中の男性像）を男が女として女性と一緒に生活し、女が男として男と一緒に生活することによって、ともにアニマ、アニムスを理想的なものに育て得たことにより、それにふさわしい男や女になりえたことで、それぞれ元にもどった時に、素晴らしい男女に成長したことが、ともに最高の幸せを掴む結果となったのではなからうか。

この物語の作者は、恐らく女性であり、女の男装での宮仕えを中心として、この物語を書かれたものであろう。多くの男たちとの接触をとおして、男たちの求める女性を十分理解し、そのための努力が幸せへつながったと考えて書いた物語ではなかったらうか。

4. 中世武士と嫁入婚の時代

嫁入婚と女の貞操 長い間貴族たちの妻問婚（招婿婚）、対偶婚から武士の嫁入婚の時代となった。武士は「さあ、私と一緒に来てください。すこし所領を持っている身ですので、貴女に財産の面倒を見ていただきたい」と13世紀の『沙石集』に武士のプロポーズをこう記している。女性が男性に従って嫁入りしたことが、女性の男性従属の道が生まれたことになるのではないだろうか。しかし単なる従属ではなく、夫の財産管理、家を預かるのが女性の役割となってきた。このことはまた女性の結婚生活を変えていく結果となった。従来のおおらかであった男女の関係は、女性に対して貞操観念の必要が考えられるようにもなった。

貞操観念は女性の嫉妬心から出発する。前代のおおらかな性関係にあっても、『蜻蛉日記』の作者兼家の妻は、夫を独占できないことの苦しみ、悲しみを日記の中に記している。また『源氏物語』の六条御息所のように、生霊となって源氏の通った夕顔にとりついて死に至らしめるなどの嫉妬のあらわれをみることができる。しかし、それ以上に新しい生き方は生まれてはこなかった。こうした妻問婚に対して嫁入婚は、同居から夫婦の愛情関係は強化され、夫に自分以外の女性との関係を認めることができなくなるであろうし、夫の女性は自分だけという考え方も強まるであろう。これが新しい女の道の誕生となるのではないだろうか。

北条政子の場合には、自分以外の頼朝の妾や浮気相手を許すことはできなかった。強い嫉妬心による復讐をおこなったといわれてい

る。頼朝の伊豆流人時代以来の愛人亀の前を襲わせたことは有名な話である。こうしたことは女は一人の男に生きるものであるという貞操観念の力説ということで捉えることができるのではないだろうか。

嫉妬から進んで嫁入婚にふさわしい女の道として、貞操観念がしっかりしたものとなっていくのである。また義経の愛人静御前に鶴ヶ岡八幡宮の舞の奉納で、静御前は「しづやしづしづのおだまきくり返し昔を今になすよしもがな」と義経思慕の歌で舞ったことで、怒った頼朝に政子は女としての道を、伊豆の石橋山敗退の頼朝を慕い、苦労した自分と同じことだとして説得して助けたことも、女の貞節の重要性を強調したものと受けとめられはしないだろうか。

北条政子は静御前の生んだ男の子を助けようとして、頼朝に強く助命を求めたともいう。これは貞操観念と相まって、今日考えられる母のイメージの確立の先駆であったともいわれている。しかし頼朝との間の自分の子供については必ずしも大切にしたとは言えないように思われる。頼家は乳母関係で自分から離れ、実朝は自分の手で育てたというが、自分の薦めた嫁をさらって、京都からの公家の娘と結婚して、嫁方文化、特に歌に憧れ、政子は頼朝とともに大事にした武士から、実朝を貴族化に引き込んだ嫁がにくかったのかもしれない。もしそうであるならば、世にいう嫁と姑との関係の起こりと見てもよくないか。嫁憎さがわが子を許せなかったであろう。

こうして頼朝と共に創設した幕府維持の為には、どうしてもわが子を涙ながらに犠牲にせざるをえなかったのであろうか。

『源氏物語』では、色好みが紳士の条件のように考えられこそしたが、女の道についてはすこしも考えられはしなかったように思われる。夫の家に入り、夫への貞操が嫁入婚の求める女性の生き方となったのであろうが、それは頼朝・政子の二人に負うところが大きかったのではなからうか。

5. 江戸時代の求められた女の道

女の鏡 (1)近松門左衛門の『心中天の網島』では、大坂天満の紙問屋治兵衛は、妻おさんとの間に2人の子供までありながら、遊里の小春と恋仲となる。おさんは悲しみ、苦しみ、じっと耐えしのんでいたと思うが、おさんの実父などの申すことを聞き入れ小春と別れることとなった。ところが小春をめぐる対立していたいわゆる恋仇から、小春をうけ出す金がないからだと散々悪口をいわれてしまう。治兵衛のいわゆる男が立たなくなってしまうわけで、おさんとしても夫の男が立たないということは忍びがたいことでもある。そこで嫁入りに際して作ってもらった大切な着物を質に入れて金をつくり、「これで小春を請け出して下さい。小春と同居しても結構です。」と金を差し出す。治兵衛は「おまえこそは女の鏡だ」と手を合わせて妻を賞賛する。しかし最後には治兵衛と小春は心中してしまうこととなるのである。

江戸時代の考え方の一つを見ることができるが、男にとって意地が立たないということは、この場合一体どういうことだろうか。夫の自己本位で妻だけが苦しみ、悲しみ、じっと耐え忍び、あげくのはてに夫の我が儘を通してやる、そこに女の鏡としての美談がある

のは一体どういうことだろうか。夫にすれば美談であろうが、妻の立場からはおかしな話なのではないだろうか。女大学にいう、妻は夫を主君として仕えなければならないと、教えられていた時代としてはやむをえなかったものであり、これが女の道であったのであろう。

家庭の平和の為には夫の不義を許す、男が廃れてしまう夫を立ててやる妻は、女の鏡であったのである。

(2)芸者・おむらは薩摩の木藤彦三と江戸で知り合い、しっかりした信頼関係を作るまでになった。当時薩摩藩は生麦事件でイギリスとの間が険悪となっていた。木藤彦三はイギリスが生麦事件の報復を計画していることをしり、おむらを口説いて異人士官勤めを志願させ、イギリス艦隊のクーバー提督のもとへおくり、クーバーから聞きだしたイギリス艦隊の動静を報告させ、いち早く薩摩に知らせ用意を整えさせたのであるという。クーバー提督が7隻からなる艦隊を率いて鹿児島湾から薩摩を攻撃したが、世界に誇るイギリス艦隊でさえ、勝利できなかったのは、おむらと木藤彦三によるものといえる。薩摩の健在は、明治維新が外国の植民地化を免れたことにつながったといえないだろうか。

愛する人のために、愛する人の云うとおりに、自分を犠牲にしたおむら、それが日本を外国の餌食になることを防ぐ結果になるうとは、思わなかったことであったのかもしれない。自分を犠牲にして、たとえ愛する人の為にとはいえ、外国人に体を売ることは、今日のように国際結婚の多くなった時期とは異なり、これほど屈辱的なことは他になかったの

ではなかったか。その屈辱をじっとこらえ、愛するひとに尽くしたことは、まさにこの時代の美談、美德だったのである。木藤もまたおむらの信頼を裏切ることなく結婚し、幸せな生涯であったことは、おむらの美德の意味を高からしめているように思えるのである。

6. 大正デモクラシー時代

新しい女性たち 大正デモクラシーは、護憲運動が盛んになり、自由・平等と人間の権利が叫ばれ、婦人の解放運動が盛んになった時代といえよう。新しい女性たちの活動はこの時代の特徴となった。

明治13年の太政官布告では、国安を妨害したり、風俗壊乱と認めたる時は新聞などの禁止、停止が明らかにされていた。大正デモクラシーの特徴である新しい女性は風俗壊乱のもとに、非難攻撃の圧力を受けるようになった。平塚らいてうをはじめ、信州の生んだ松井須磨子も新しい女の代表であった。平塚らいてうは『中央公論』に「自分は新しい女である。……自分は太陽である。……新しい女は「昨日」を呪っている。新しい女はもはやいしたげられたる旧い女の歩んだ道を、黙々として、ただいいとして歩むに堪えない。新しい女は男の利己心のために無智にされ、奴隷にされ、肉塊にされた如き女の生活に満足しない。新しい女は男の便宜のために造られた旧き道徳、法律を破壊しようと願っている。……」と寄せている。

このように新しい女は男尊女卑、良妻賢母に立ち向かって、女性の権利と自由を求めた女性たちだったといわれている。松井須磨子は、島村抱月の芸術座でカチュシャやカルメ

ンを上演してブームをまきおこし、抱月との恋などで風俗壊乱の女王といわれた。抱月がなくなると彼女も後追い自殺を遂げて、同情をかったというが、女性の生き方が、伝統的な考え方であった男性に従順、そして犠牲、我慢、良妻、賢母に期待された女性像の壁は厚く、新しい女の考え方や行動は風俗壊乱以外の何物でもなかったのかもしれない。

こうした女性の美德は、昭和戦後までの女性の美德といわれ続けてきたといえよう。大正デモクラシーや新しい女は、国民の頭のを吹き抜ける風の如く通り抜けていってしまった感が強いのである。

7. 戦後の時代

男女平等 日本国憲法は、性別により差別されないことを明らかにした。女性の参政権が認められ、雇用機会均等法が出されて、完全に男女平等となった。しかし色々のアンケートでは、男性は女性の生き方が、男性と同等になったとする回答が多くなっているが、女性は現実には真の平等に至っていないと回答するものが多い状態である。職場では確かに、管理職が依然まだ少ないことなどの問題を残しているが、家庭にあっては、財布を握る母

親の力が大きく（約85%）、その地位は高くなっている。女性時代の到来とまで言われるような女性の活躍が、色々の分野で見られる時代となっていることは、誰の目にもはっきり映っているのではないだろうか。

8. 結 び

高齢化時代 25%が高齢者によってしめられる時代といわれる21世紀は、夫婦と子供1人にお年寄り1人という4人の家族の時代であろう。夫婦はともに子供を育て、お年寄りの面倒をみなければならぬ社会の事である。夫婦の共生と子どもやお年寄りへのやさしさ、暖かさがより大事になり、必要となることは明白のように思われるのである。

そして、このことは地球にも、自然に対しても全く同じことがいえる。

以上日本の歴史を通して考えてみて、いかなる時代であっても、女性は男性にない女性のみ特性、女性のやさしさ、暖かさ、おもしろいやり、気配りによって社会や家庭を明るく、幸せを作り出す上に大きな業績を残していることをみてきた。そして21世紀もより大切になることもみたところである。

参考文献

- | | | |
|------------|---------------|---------|
| 古事記・日本書紀 | 学術文庫 | 講談社 |
| 日本語のこころ | 渡部昇一 | 講談社現代新書 |
| 吾妻鏡 | 岩波文庫 | |
| 日本女性史 | 脇田晴子他編 | 吉川弘文館 |
| 心中天の網島 | 近松門左衛門（近松世話物集 | 旺文社） |
| 青鞥の時代 | 堀場清子 | 岩波新書 |
| 裁かれる大正の女たち | 清永 孝 | 中公新書 |

秘密の日本史

とりかえばや 男と女

神話にみる女性

歴史にみる日本人の人間関係

樋口清之

河合隼雄

小出卓二

小出卓二

祥伝社

新潮社

長野女子短期大学記要

長野女子短期大学出版